

翻 刻

連

證

集

(3ウ)見え侍也。

連證集

児問云

(一)家の風と申句に、月のかつらと付て侍しハ、いかなるよりあひにて侍哉らん。

僧答云

是ハ拾遺集に、久かたの月の桂もおるハかり家の風をもふかせてしかな、と侍本哥にて、

月のかつらの秋にあひても と侍しに、

ならばすハよも身にしまし家の風 と付侍し。

(二)命と申こと葉に、さやの中山と付て侍しハいかに。是は、中比の哥仙西行の哥に、年たけてまたこゆへしとおもひきやいのち成けりさやの中山、と侍を、今ハ新古今の作者の哥ハ、運哥の本哥にはとるへきよし、花の下に申侍間、この哥を本哥にて、『(2ウ)命のうちにいつかとハまし と申句に、

都にはさやの中山とをければ と付侍し也。

(三)いのちもしらぬと申句に、みなせ川と付て侍りしは如何に。

是は後拾遺ニ、たえやせむいのちもしらぬみなせ川よしなかれても心みよ君、と申本哥にて、

いのちもしらぬあらましなせそ と申句に、

うき世にはすみはつましきみなせ川」

(四)いたつらにと申こと葉に、あすかと付て侍しハ如何に。これは万葉に、たをやめか袖ふきかへすあすかへせ都を遠みいたつらにふく、と侍哥にて、

いたつらにのみ身ハふりにけり と申句に、

去ぬるなか月のすゑに、安楽寺にまうて、廟院のかたはらに通夜をし侍しに、まちかきほとに都より下たる好士とて、黒衣の僧ひとり、同かたはらにねんしゆして侍あいた、鹿のねもはや夜さむになれば、松の嵐もすさまじきに、夜半のともし火もかすかに、あけのたまかき神さひて、云しらぬ秋のあはれを、如何にとも申度侍れとも、そのうつは物に「あらされは、おもひなからふけゆく程に、又宮めぐりとおほえて、小児一人やつれたるすかたにてまうてたり。僧のかたはらに有とみる程に、はや見参したる人とおほしくて、会釈して物かたり侍。いかにと大きくほとに、こ児のいはく、此道に心さしハ侍とも、餘に初心に侍あいた、当社の春の梅の下、櫻門の秋の月節ニ、神のたむけにも、和歌をつつけ、運歌をつらねて、情ある宴席也。』(1ウ)しかれとも、きしらぬ事おほく、うたかハしき事のみ侍れば、おのつから思よる風情をもしらざるに、おそれて申いたす事も侍らす。いかしてすこしこのみちを心得て、此うたかひをはるへき、と申ニ、僧のいはく、当世のさかにて、和哥のみちをたしなむ人々、取分運哥をさかりにもてなし侍る程に、これもいかしてと、心さはふかく侍れ共、庭の訓もつたへされは、その人の家風とて、「耳にとまる事も侍らす。まして、是こそうけ給し事とて、人にかたり申へきこと葉ハ侍らねとも、なにとなき一座の運哥の百いんなどに、常にいてきたるよりあひは、聞とりさいかくとて、心えたる事も侍れば、あら／＼申侍らん、とて云をきくに、さもとおほしき事も侍あいた、いさ／＼か忘ぬさきにとて、宿坊へ帰て、しるし侍しかとも、いろはの次第をたて、申たりと』

あすかゝハはやく見し世ハ忍ハれて と侍し。

(五) いもせと申こと葉に、なかとハかり付て侍ハいかに。是ハ古今に、なかれてハいもせの山の中をつるよしの川のよしや世中、と侍本哥にて、『(5ウ)

へたつる中となと成にけむ と申句に、

水上はなを雲ふかしいもせ山 と侍し。

(六) いさよふ雲と申句に、はつせの山と付て侍しは如何に。是ハ万葉に、かくれぬのはつせの山の山きハいさよふ雲ハいもにかもあらん、と侍にて、

はつせの山の雲そかすめる と申句に、

月ハいま花の木のまにいさよひて と付し也。

(七) いこま山と申句に、やとの木すゑと付て侍しハいかに。是ハ後拾遺に、我やとの梢の夏になるときハいこまの山ち見えす成行、と申侍にて、

いこまの山をよそにへたてゝ と申句に、

この比ややとの木すゑもしけるらん と侍し。

(八) いこま山と申句に、たかやすのさと侍しハ、大和に、たかやすハ河内にて侍、かやうにも侍へき哉。是ハ、古来哥合と申物に、家長の哥哉らん、『(4ウ)雲ハれぬいこまの山の如何ならんふもとも雪はたかやすのさと、と侍にて、

かりねさひしきたかやすのさと ム申句に、

雪ふかきいこまの山を越かれて と付し也。

(九) いにしへと申こと葉に、しつのをたまきと付て侍しハ如何に。是ハいせ物かたりに、いにしへのしつのをたまきくりかへしむかしをいまになすよしもかな、と侍哥にて、『

あまりいやしきしつのをたまき と申句に、

いにしへのおもひにもなく身ハふりて と付し也。

(一〇) いまはかきりと申句に、つま木とるへきと付て侍しハ如何に。是もおなじき物かたりに、すみわひぬいまはかきりの山里につま木とるへきやともめてん、と侍にて、

つま木とるへきみちやとハまし と申句に、

ふる雪のいまはかきりとつもれとも と付し也。』(6ウ)

(一一) いまこそあれと申こと葉に、われもむかしハと付侍しハ如何に。是ハ古今ニ、いまこそあれわれもむかしハおとこ山さかゆくときもありこしものを、と侍にて、

我もむかしハ恋しきものを と申句に、

うき身ともいまこそかくもなりにけれ と付し也。

(一二) いはねはこそと申句に、いはつゝしと付て侍しハ如何に。是ハ古今に、おもひいつるときハの山のいはつゝしいはねハこそあれ恋しき物を、と侍にて、

いはねはこそあれおしき眷かな と申句に、

くれかゝる日か希の色やいはつゝし と付し也。

(一三) はしたかと申句に、こひと付侍ハ如何に。是ハ、鷹の木居に、恋をかよハしてつゝけ侍也。待賢門院の堀河か哥に、かりにこし人をこそまてはしたかのこひを忘れ心ならひに、と侍本哥にて、

こひのうき名はよそにふりけり と申句に、『(7ウ)

はしたかのかり庭の雪のぬれ衣 と付し也。

(一四) はしたかと申句に、又しる柴と付て侍しハいかに。是ハ後撰に、わすれなはうらみさらなむはしたかのとかへる山の峯のしるし

不遇也
は紅葉す、と侍にて、

またわけのほる峯のしるしは と申句に、

はしたかのとやまの雪に跡つけて と申侍し也。

(三) 花にあかぬと申句に、けふのこよひと付て侍し如何に。これは伊勢物語に、花にあかぬなかめハいつも」せしかともけふのこよひにるときハなし、と侍にて、

花にはあかぬ春のくれかな と申句に、

わかれなハ今日のごよひをかきりにて と付し也。

(二) 花の散と申句に、ふるすに帰とりと付て侍しハいかに。是ハ千載集に、花はねにとりハふるすにかへる也春のとまりを知人そなき、と侍哥にて、

散花をねに吹かへすあらし哉 と申発句に、

なきてや鳥も雲に入ぬる と付し也。

(一七) 花の散と申句に、入あひのかねとつけて侍しハいかに。是ハ能因か哥ハ、山さとの春の夕をきて見れハ入あひのかねに花を散ける、と侍にて、

おしむ日かけも入会のかね と申句に、

あすまでもあらしと見てちる花に と付し也。

(一八) 又あなちに入あひと侍らねとも、かねのをと、侍にも、此哥のよりあひにて、

かすみにしらむかねのをとかな と申句に、

よと雲の下なる峯に花ちりて と付し也。

(一九) 秋の下葉と申句に、ひとり有など申て侍しハいかに。是ハ古今に、秋はきの下葉色つくいまよりやひとりある人のいねかてにする、と侍にて、

ひとりねさめの月をみるかな と申句に、

あきはきの下葉の露のたまくらに と付し也。

(二〇) 柞原と申句に、いはたのをのつて侍しハいかに。(一九ウ) 是ハ万葉に、山しろのいはたのをのゝはゝそはら見つゝや君か山ちこゆらむ、と侍にて、

いはたのをのゝすみれつむ也 と申句に、

柞原かすみてつく山もとに と付し也。

(三) はくゝむおやと申句に、入えのすとりと付て侍しハいかに。是も万葉に、むこのうらの入えのすとりはくゝめる君をはなれてこひにしぬへし、と云本歌にて、

はくゝむおやをなをしたふかな と申句に、

ともすれハ入えのすとり音になきて と付し也。

(三三) はとふく秋と申句に、人をとまれと付て侍しハ如何に。是は萬葉に、ます羅をかはと吹秋ハ音たてゝとまれと人はいはぬハかりそ。

はとふく秋もくれそかなしき と申句に、

問ればやとまれと人をしたふへき と付し也。

(三三) にしき木と申句に、けふのほそぬのと付侍しハ(一〇ウ)いかに。是ハ後拾遺に、にしき木ハたちなからこそくちにけれけふのほそぬのむねあはしとや、と侍にて、

けふのほそぬのたちなわかれそ と申句に、

にしき木ハちつかも人はまつ物を と付し也。

にしき木もけふのほそぬのも、ともにしらぬ事に侍り。如何なる事にか。是ハ、みちのくにハ、男はしめて思か希たる女のもとに、にしきのことく色とりたる木を、門にたつるに、さもと」思ふ

おとこのたてたるをハ、やかて取入、いなとおもふハ、とり入ぬとかや。それを、しゐて三年千日たてつれハ、ちからなくとりいか侍とかや。その心を万葉にも、にしき木ハちつかに成ぬいまこそは君かしらせぬねやの中見め、とよめり。又けふのほそぬのとハ、みちのくにけふのこほりより、むかし布をもて、国王にたてまつりけるか、うつくしき布とて侍けるあいた、けふの『(11ウ)ほそぬのと申ならハして侍りけるを、同国の名物なれハ、能因もよみあハせけるにや。しからハいつくにも、かやうに同国同所ならん物をハ、説あわすへきにこそ。

(四)にしきと申句に、小車とつけ侍ハいかに。是は、錦のものにちいさき車を付たるあいた、万葉にも、をくるまのにしきのひもをときたれてあまたねもせず君ひとりなり、と侍にて、

紅葉のにし木たちもとまらずと申句に、
小車こぐるまのわかるゝ秋の夕風ゆふかぜに、と付し也。

(五)二万里と申句に、御つき物と付け侍ハいかに。是ハ金葉集に、御つき物はこふ世ころをかそふれハにまのさと人かすそひにけり。

いまもさかゆく二まのさと人 と申句に

御つき物むかしの跡に立かへり と付し也。

(三)新枕と申句に、としのみとせなと付侍ハ如何に。『(12ウ)

是ハ伊勢ものかたりに、あらたまのとしのみとせをまちわひてたゝこよひこそにゐまくらすれ、と侍にて、

みとせになりぬ心つくしハ、と申句に、

いまむすふ契ハかりや新枕 とつけ侍し也。

(三)ほととぎすと申句に、むら雨を付侍ハいかに。是ハ家隆卿

の、いかにせむこぬ夜あまたのほととぎすまたしとすれハむら雨の空、とよまれたるにて、

月よりさきのむら雨の空 と申句に、

郭公かくらふ夕ゆふの雲うみになきそめて と付し也。

(二)郭公に、又有明の月をつけ侍ハ如何に。これハ千載集に、時鳥ときどりなきつるかたをなかもれハた、在明の月あけぼのづきの月つきのこれる、と侍にて、

うきはわかれの在明の月 と申句に、

一こゑをね覚ねさめに聞きて郭公 と付し也。『(13ウ)

(元)郭公に、杉すぎのむら立たちをつけ侍ハいかに。是ハ西行さいぎやうか、なきすとともこゝをせにせむ時鳥ときどり山田やまのたにの原はらの杉すぎのむら立たち、とよめるにて、

杉すぎをしるしに山やまやこゑまし と申、

なくかたは雲うみふかくとも郭公 と付し也。

(三)蟹かにと申句に、秋あきちかしとつけ侍ハいかに。これは古今こきんに、行ゆはたる雲うみのうへまでいぬへくハ秋あきかせ吹ふとかりにつけこそ、と侍

哥うたにて、

夕ゆふになれハ行ゆはたるかな と申句に、

涼すずしきハ雲うみのうへまで吹風ふきかぜに と付し也。

(三)とりの音ねとも、又またなくとりとも申句に、花はなの山やまと付侍ハいかに。是は暹昭せんせうの哥うたに、まてといは、いとまかしし花はなの山やましハし

となかむ鳥とりの音ねもかな、と侍哥うたにて、

かすかに成なりぬとりの一聲 と申句に、

おくはなを雲うみをかさねて花はなの山 と付し也。『(14ウ)

(三)とふそとはるゝと申句に、いくたの杜もりとつけ侍ハいかに。是ハ詞花集しけむしに、君きみすまハとハまし物ものをつのくにいくたのもりの秋あきの

はつかせ、と申侍にて、

木葉をとふはあらしなりけり と申句に、

色かはる生田のもりの夕しくれ と付し也。

本哥もいまの遠哥も、いくたのもりとこそ侍を、いくたのさと、

も、野へとも心うへきにや。とふそ」とはるゝとつけ侍ハ、尤いは

れたる襖に侍れとも、いくたにとふと侍れハ、それをあんにて、さ

とも野辺にもつけ侍こそ。正義に本哥をとるへくは、生田のもり

といはん句に、とふと侍らんハよくこそ侍らめ。

(三三)とふとりと侍句に、あすかとつけ侍ハいかに。是ハ万葉に、

とふ鳥のあすかのさとをおきていなハ君かあたりハ見えすかもあら

ん、と侍哥にて、『(15ウ)』

あすかのさとに衣うつ也 と申句に、

飛鳥のは山の風の夜さむむにて と付し也。

(三四)年の暮と云句に、いくたをつけて侍ハ、是ハ新院の百首登

申にも、となせ川こそ筏士のつなてなハ心ほそきハとしのくれか

な、と侍り。又ちかき世の哥にも、となせ河こそいかたしのみなれ

さほさしてたのめしくれをまたるゝ、なと侍ハ、たゝ筏と申句につ

けて、くれの「あひしらいたるにこそ。

年のくれとてさきいそくかな と申句に、

行河のはやきなかれの筏師も と付し也。

(三五)とこよの国と申句に、まつらのうらと付て侍ハいかに。是

ハ、あまりことの外なるあひしらいたるに侍れとも、君をまつまつらの

浦のあま人はとこよの国のあまをとめかも、と侍よりあひにて、

床よの国はいつくなるらん と申句に、『(16ウ)』

つくしなる松浦のうらは見しかとも と付し也。

(三六)とりへ野と申句に、つるのはやしと付て侍しハいかに。鶯の

林の心を後拾遺、たき木つき雪ふりしけるとりへ野ハつるのはや

しの心ちこそすれ、と侍にて、

鶯のはやしをおもひこそやれ と申句に、

ふる雪のけふりをうつむとりへ野に と付し也。

(三七)ちりはらふたと申句に、床夏の花を付て侍しハいかに。是

は躬恒か、ちりをたにすゑしとそ思ふうへしよりいもとわかぬると

こなつの花、とよみたるにて、

鶯もはらはぬ庭のさひしさ と申句に、

床なつの花よりさきのまかきにて と付し也。

(三八)千鳥と申句に、いもかりゆけはと申ハいかに。是はつらゆき

か、思かねいもかりゆけは冬よのかは風さむみ千とりなく也、

とよめるにて、『(17ウ)』

いもかこぬよそふけてかなしき と申句に、

なく千とり月にうらみの聲たてゝ と付し也。

(三九)ぬのさらすと申句に、卯の花を付侍ハいかに。是ハ万葉に、

てたまゆ羅しつはたぬのをおりかけてさらしえたりとみゆるうの

花、とよめるにて、

たかぬのさらすやとみゆらん と申句に、

卯の花の花もてゆへるまかき哉 と付し也。

(四〇)ぬのひきの瀧と申句に、あまの河とつけ侍ハいかに。名所

などハ、同てくをこそつけあわせたるに、他國をもよせあわせ侍へ

きにや。是ハ、みなかみハあまの河にやつ、俱らん空よりおつるぬ

のひきの瀧、と侍にて、

しるくみゆるやぬのひきのたき と申句に、

流行あまの川渡すゑうけて と付し也。

(四) おみなへしと申句に、花のひとときとつけ侍ハ (18ウ) 如何に。これハ古今に、秋のよになまめきたるをみなへしあなこことし花もひとよき、とつけ侍にて、

あたる露の契たのまし と申句に、見はなもたよひとよきの女郎花 と付し也。

(五) おみなへしと申句に、おほかる草と付て侍しハいかに。是ハ古今に、おみなへしおほかるのへにやとりせはあやなくあたるの名をやしたちなん、と侍にて、

おほかる草の花の中にも と申句に、名を聞そけになつかしき女郎花 と付し也。

(六) おくれさきたつと申句に、すゑの露と付侍ハいかに。是ハ廻昭か哥に、すゑの露本のしつくや世中のおくれさきたつためし成らん、と侍哥にて、

草葉のすゑの露のたま物 と申句に、(19ウ) うき雲のおくれさきたつ時雨にて と付し也。

(七) をとは山と申句に、松むしと付て侍ハいかに。これは後撰に、松むしのはつこゑさそ秋風ハをと山より吹そめてけり、と侍哥にて、

よハるハかりに松むしそなく と申句に、身にさむき夕の風のおとは山 と付し也。

(八) おくら山と申句に、鹿の音を付るハいかに。万葉に、小倉山峯たちならしなく鹿のへにけん秋を知人のなき、と侍哥にて、

妻とふ鹿のあかつきのこゑ と申句に、峯にはや月かたふきておくら山 と付し也。

(九) をしほ山と申句に、神代の事を付侍しハいかに。是ハ業平の哥ミ、おほ原やをしほの山もけふしこそ神よの事もおもひ出らめ、と侍哥にて、

神代の事をつたへきにも と云句に、(20ウ) いまも猶御幸ハたえずをしほ山 と付て侍し。

(一〇) をの山本と申句に、夢かと思ふとつけ侍はいかに。是は、業平の、ひえの山のふもとに、小野と申所に、これたかの御子のをはしましけるまゐりて、忘ては夢かと思ふおもひきや雪ふみわけきみを見んとは、とよめりけるを、

夢かと思ふ人のおもかけ と申句に、をのよさと雪ふみわけしわかれ路に と付て侍し。

(一一) 小車と云句に、あふさかを付侍は如何に。是ハ寂蓮か哥に、山かつのあふさかこゆるを車にころのりたる暁のこゑ、とよめるにて、

いかにまちてかあふさかの山 と申句に、小車のこのわかれこそかなしけれ と付し也。

(一二) をみの衣と申句に、とよのあかりと付て侍しハいかに。是は後拾遺に、まことにやなへてかさねしをみ衣とよのあかりのかくれなきよに、と (21ウ) 侍哥にて、

豊明のあり阿氣の月 と申句に、をみ衣袖には霜のかさなりて と付し也。

(一三) 和歌の浦と申句に、たつのなくと付侍るハいかに。これハ赤人の哥に、和かの浦にしはみちくれハかたを波あしへをさしてたつ

なきわたる、と侍にて、

紅葉もいまはあたなる木からしに と付し也。

(七) から衣と申句に、はる／＼きぬるとつけ侍はいかに。是は業平の、から衣きつゝなれにし妻しあれハはる／＼きぬる旅をしを思ふ、と侍にて、

はる／＼きぬるけふのみちかな と申句に、袖ぬらす露も夕へのから衣 と付し也。

(七) かつら木山と申句に、よそと云あいしらい侍はいかに。是は願輔之哥に、かつらきやたかまの山」のさくら花雲井のよそに見てや過なん、と侍哥にて、

にはふか花のかつら木の山 と申句に、雲霞よそにかゝれる木すゑかな と付し也。

(七) 春日野と申句に、わか草の妻とつけ侍はいかに。是は古今に、春日野はけふはなやきそわか草のつまもこもれり我もこもれり、と侍本哥にて、(29ウ)

妻をこめてや鹿のなくらん と申句に、秋草の花さくころの春日野に と付し也。

(七) 龜山と申句に、幾薬と付はへりしハいかに。是は拾遺に、かめやまにいく薬のみありけれハとよめむかたもなき別かな、と侍哥にて、

かめのうへなる山とこそきけ と申句に、万代もいく薬をかたつねまし と付し也。

(七) かけひの水と申句に、あふさかとかつけ侍ハ如何に。是は八潮河院百首に、あふさかのかけひの水になかるゝハをとほの山の紅葉成けり、と侍哥にて、

かけひの水のなとこほるらんと 申句に、

あふさかの關の清水ハよもたえし と付し也。

(七) よこ雲と申句に、わかれを付たるハいかに。是は定家卿哥に、春のよの夢のうきはしとたえして峯にわかるゝよこ雲の空、と侍にて、大(30ウ)かたわかれによこ雲は、ふかきよりあひ也。たゝ今ふとは不覺語也。

わかれそいそく春のかりかね と申句に、あけわたる峯の體のよこ雲に と付し也。

(七) 世のありさまと申句に、心かろしとつけ侍はいかに。是は伊勢物かたりに、いてゝいなは心かろしと伊ひやせんよのありさまを人ハしらねと、と侍にて、

ちきりあたなる心かろさに と申句に、わひはつる世のありさまハよもしらし と付し也。

(七) よふ子鳥と申句に、立木もしらぬとつけ侍はいかに。是は古今に、をちこちのたつ木もしらぬ山中におほつかなくもよふ子とりか那、と侍にて、

たよりもしらぬみちのおくかな と云句に、鳴かたもさたかにはなしよふ子鳥 と付し也。

(七) よもきかそまと申句に、きり／＼すをつけ侍ハ如何に。是は曾丹か、なげや／＼よもきかそまの(21ウ)きり／＼す秋のわかれハさそなかなしき、と侍にて、

夕霧ふかし庭のよもきふ と申句に、をのか音のうらみやふかききり／＼す と付し也。

(八) 夜の契と申句に、くめの岩橋とつけ侍ハ如何に。是は拾遺に、岩はしのよるのちきりも絶ぬへしあくるわひしきかつら木の神、と侍哥にて、

よるの契ちぎやとをさかるらん と申句に、
いは橋はしのつゝかぬ峯みねに中たえて と侍也。

(八一) よひくことにと申句に、関守せきもりと侍しハ如何に。是ハ伊勢物かたりに、人しれぬ我かよひちの関守せきもりはよひくこととうちもねならん、と侍にて、

ゆるさぬ恋こひの関せきもりもうし と申句に、

こんといふ契ちぎまたるよひくことと付し也。

(八二) たまつさと申句に、かりかねをつけ侍ハ如何に。是ハ古今に、秋かせにはつかりかねそきゆなる誰たかたまつさをかけてきつらん、と侍にて、(32ウ)

雲井うゑいのかりの音にはなけとも と申句に、

たまつさのたよりもしらぬ思おもかな と付し也。

(八三) たまくらと申句に、はつを花とつけ侍ハ如何に。是ハ万葉に、さをしかの入野いりののすゝきはつをはないつしかいもかたまくらにせむ、と侍哥にて、

手枕たまくらさひし夜半よの秋風 と申句に、

露つゆなから野辺のの花をかさしきて と付し也

(八四) 橋はしと申句に、むかしをつけ侍ハ如何に。是ハ伊勢物「かたりに、五月まつ花たち花の香かかけはむかしの人の袖のかそする、と侍哥にて、

ふたゝしふたゝしのふむかし成なりけり と申句に、

橋はしの露つゆもさつきのたましくしけ と付し也。

(八五) たむけと申句に、紅葉もみぢをつけ侍しハ如何に。是ハ古今に、たむけには□□のそてもきるへきもみちにあける神かみやかへさむ、と侍哥にて、

たむけをいそく秋のかり人 と申句に、(33ウ)
越こかゝる山は紅葉もみぢの木かけにて と付し也。

(八六) 立たちわかるよと申句に、いなはの山をつけ侍はいかに。是ハ古今に、立たちわかれいな葉はの山のみねにおふる松ときかへいまかへりこむ、と侍にて、

稲葉いなはにあまる秋のしら露 と申句に、

へたてつる田面たのものきりの立たちわかれ と付し也。

(八七) 誰たれにとハましと申句に、芝あしはの露とつけて侍しハ如何に。それハ狹衣さうろもの哥に、たつぬへき草くさのハラさへ霜しもかれてたれにとハましみちしハの露、と侍にて、

霧きりよりおくを誰かとハまし と申句に、

みちしはの露つゆわけまよふ夕ゆふかな と付し也。

(八八) たまらと申句に、おもひ草とつけ侍はいかに。是ハ俊成としなり卿きやうに、思おもくさ葉はすゑにむす白露しろゆめのたまらきてハてにもたまらす、と侍にて、

たまらむす露もたまら須す と申句に、(34ウ)

したへともくれ行秋のおもひ草 と付し也。

(八九) たつのなくと申句に、あけぬこのよハとつけ侍はいかに。これハ、あふみちをあさたちくれハうねのよにたつそなくなる明あけぬこのよは、と侍哥にて、

よこ雲くもしらむあけぬこのよは と申句に、

松山まつやまの木こすゑのよそにたつなきと付し也。

(九〇) 田面たのものかりと申句に、我かたにこそと付しはいかに。是ハ伊勢物かたりに、みよしのゝたのもの「かりもひたふるに我かたにこそよるとなくなれ。

たのものをつるかりの一むら と申句に、
我がたに夕ゆふの霧きりへはたつれと 付し也。

(九) たつた山と申句に、夜半よなかにや君きみとつけ侍いは如何いかに。是これは伊勢いせ物語ものがたりに、風かぜふけハおきつしら波なみたつた山夜半よなかにや君きみかひとりゆくらん、と申哥まことにて、

夜半よなかにや春はるのこゑてきぬらん と申句に、『(35ウ)
明あけわたる露つゆの霞かすみのたつた山 と付し也。

(六) 立たつた川がはと申句に、からくれなむとつけ侍いハ如何いかに。是これハ同物おなじものかたりに、千ち和わやふる神代かみよもきかすたつたかハからくれなむに水みづくるとは、と侍いにて、

からくれなむや秋あきのもみち葉は と申句に、
しくれつる名残なごりの波なみのたつた山 と付し也。

(五) 谷たにのかけはしと申句に、おくら山やまをつけ侍いハいかに。是これハ金きん葉はに、おくら山やまのあらしの吹ふ「まゝに谷たにのかけはし紅葉もみぢしにけり、と侍いにて、

通人かよなきたにのかけはし と申句に、

雲くもふかくかさなる下したのおくら山 と付し也。

(四) たけくまの松まつと申句に、ふたき三木みきなど付侍いは如何いかに。是これハ後拾遺ごしゅういに、たけくまの松まつは二木ふたきをみやこいかにととは三木みきとこたへん。同返哥おなへんかに、たけくまの松まつは二木ふたきを三木みきといふハよくよめるとハあらぬなるへし、と侍哥まことにて、『(36ウ)

二木ふたきあるなりたけくまのまつ と申句に、

偽いつはりに三木みきとはいかゝこたふへき と付し也。

(三) たけくまの松まつに、又山またやまのはなわと付侍いハいかに。是これは重之しげゆきの哥まことに、たけくまのはなわにたてる松まつたにも我われことひとりありとやハ

きく、と侍いにて、

さひしくのこるたけくまの松 と申句に、
時雨しぐれ行山ゆきやまのはなわの秋風あきかぜに と付し也。

(九) そともと申句に、ならの木陰きのかげとつけ侍いハいかに。「是これハ、新しん古今こきんニ 惠慶けいか哥まこと、我われやとのそにたてるならの葉はのしけみにすゝむ夏なつはきにけり、とよめるにて、

ならの落葉おちそまつしくれける と申句に、

軒のきちかきそとも山の木きからしに と付し也。

(九) そともと申句に、又またかしハとつけ侍いハ、是これハならの葉はかしハと申せハ、たゝ同事おなじじにて侍いれとも、能のう因いんか哥まことに、ねやのうへにかたへさしおほひそ』(37ウ)ともなる葉はひろかしはにあられふる也、と侍哥まことにて、

そとも木きすゑあられふる也 と申句に、

かしは木きのもろきはもりの袖かみ無な月つき と付し也。

(九) 袖そでと申句に、濛みと申侍いハ如何いかに。是これハ、袖そでのみなとよて出羽でわの国くにの名所ななところにて侍いを、定さだ家かも、鳴千鳥なるせんりう袖そでの濛みをとひこかしもろこし舟ふねのよるのね覚おぼに、と侍いにて、

みなとのあまのしほはこふとて と申句に、

袖そでことに分わけける月の光ひかりかな と付し也。

(九) 袖そでに、又尾花おしなとも、花はなすゝきともつけ侍いハいかに。是これハ古今こきんニ、秋あきの草くさのたもとか花はなすゝきほにいて、まねく袖そでとみゆらん、と侍いにて、

袖そでにや露つゆのをきあまるらん と申句に、

秋草あきくさの中なかにもわきて花はなすゝき と付し也。

(四) そのはらと申句に、ふせやとも、はゝきゝともつけ』(38ウ)

侍ハいかに。是ハ古今こきんに、その原はらやふせやにおふるは木きのありと
は見えてあハぬ君きみかな。又後拾遺ごしゆいには、しなのなる其原そのはらにこそあら
ねとも我われは木きといまはたのまむ、と侍にて、

しつかふせ屋やそ人ひとめまれなる と申句に、
たつぬへきそのはらからやなかるらん と付し也。

(10) ぞなれ松まつと申句に、いく秋風あきかぜとつけ侍しは如何いかに。是ハ、
みよしのきき山やまきはにたてる松まつ「いく秋あきかせにぞなれきぬらん
と侍にて、

いく秋あきかせのぞなれきぬらん と申句に、
ふりぬれとつれなき色のぞなれ松まつ と付し也。

(11) つたのはそみちと申句に、うづの山やまをつけ侍しはいかに。是
ハ、伊勢物語いせものがたりにも申たれとも、雅經卿まことねに、ふみわけしむかしハ夢
かうつの山やまあとも見えぬつたの下みち、と侍にて、

夕ゆふきりふかしうつの山やまと申句に、『(39ウ)
色いろかはるつたの下みち露つゆわけて と付し也。

(12) つしと申句に、出したとつけ侍しはいかに。是ハ金葉きんえつに、
入いりさす夕ゆふくれなるの色いろ見えて山やましたらす岩いわつしかな、と侍
にて、

花はなに色いろあるいはつしかな と申句に、
暮くれかゝる山下したみち道みちはかすめとも と申侍し也。

(13) 月のつきのころと申句に、片山かたやまきゝすと付侍しハ如何いかに。是ハ建
保四年けんぽうしよんの百首ひゃくしゆに、月のつきのころ「かた山やまきゝすとゑたてゝあくるもおし
くかすむ架かかな、と侍にて、

妻つままよはしてきゝすなく也 と申句に、
月の入いりかた山やまか希まれやかすむらん と付し也。

(14) つけのおくしと申句に、しほやくあまとつけ侍しはいかに。
是こゝは、あしのやのなたのしほやきいとま波なみつつけのをくしもさゝてき
にけり、と侍しにて、

しほやくあまのひまもなけれと と申句に、『(40ウ)
このほとはつけのおくしもよもとらし と付し也。

(15) 鶴つるのよはると申句に、松まつのはなと付侍しはいかに。是ハ
基俊卿もととしやうに、松まつの花はなとかへりさける君きみか代よになにをあらそふ鶴つるの
よはひそ、と侍にて、

千ちとせの松まつのはなひさしかれ と申句に、
春はることに鶴つるのよはるも重かさなりて と付し也。

(16) 子日このひの松まつと申句に、君きみかよはるとつけ侍しはいかに。是
ハ、堀河院ほりがわいん百首ひゃくしゆに河内かふちか、君きみか代よの千ちとせをのへにねのひして
松まつのよはひをかそへつるかな。

子日このひの野辺のへに春はるそひさしき と申句に、
我わが君きみは松まつのよはひの地ちよまでも と付し也

(17) ねくれたれかみと申句に、池いけのたまもと付侍しはいかに。是ハ
人丸ひとまるの哥うたに、わきも子こかねくれたれかみをさるさわの池いけのたまもとみ
るめかなしき、と侍にて、『(41ウ)

(コノ間五丁欠。)

(18) 幾度いくたひか神かみに契ちぎをむすひ松まつ と付し也。

(19) むぐらのやとと申句に、ひしき物ものと付侍しはいかに。是
ハ伊勢物語いせものがたりに、おもひあらむむぐらのやとにねもしなむひしき物ものに

は袖をしつゝも、と侍哥にて、

はらはぬ床はしくものもなし と申句に、

住すてゝむくらのやとゞ成しより と付し也。

(二二)むれゐる鳥と申句に、立空もなきと付て「侍しハいかに。

後拾遺に、夏かりのたまえのあしをふみしきむれゐる鳥の立そら

もなき、と侍哥にて、

立かたもなき身とそ成ぬる と申句に、

夏かりのあしにまよふはぬけ鳥 と付し也。

(二二)むせふおもひと申句に、かはらやのけふりと付て侍しハい

かに。是ハ有家の哥に、かはらやのけふりハしたにむせふともおも

ひありとハ人(42ウ)にしらせし、と侍哥にて、

むせふおもひも人やしらまし と申句に、

かはらやの軒よりあまるした懸 と付し也。

(二二)むまやつたひと申句に、すゝのこゑと付侍しハ如何に。是

ハ、駅路鈴の心をよめる哥に、あふさかの関のせきもりいてゝみ

よむまやつたひとのすゝきこゆ也、と侍にて、

むまやつたひとのとりならねとも と申句に、

はし鷹のすゝの音こそきこえけれ と付し也。

(二二)根と申こと葉に、くすの葉と付て侍しハいかに。これハ、

古今に、平定、文か、あきかせの吹うらかへすくすの葉のうらみて

も鍾うらめしきかな、とよめる哥にて、

うらむる虫もこゑよはる也 と申句に、

はつ霜のをかへのくすの秋かせに と付し也。

(二二)うき名なかずと申句に、むもれ木と侍は』(43ウ)

(コノ間一丁欠。)

(二二)人のこさらん、と侍にて、

我身うつらの音こそなかるれ と侍にて、

秋草のかりにも人に聞れねは と付し也。

(二七)うちの河瀬と申句に、いさよふ波と付侍しハいかに。是ハ

万葉に、ものゝふのやそうち川のあしる木にいさよふ波のよるへし

らすも、と侍にて、

秋やさひしきうちの川長 と申句に、

月ハいまいさよふ波の音までも と付し也。」

(二二)みな山の山もとゞ申句に、やとはなくしてと侍しハいかに。

是ハ万葉に、しなかととりゐなのをゆけはありま山夕きりたちぬやと

はなくして、と侍にて、

霧にそまよふゐなの山もと と申句に、

やともなき野への霧にわけぬれて と付。又、

たれとありまの山をこえまし と申句に、

とまるへきやとハなくして日ハ暮ぬ と付し也。』(44ウ)

(二二)ゐてのしたおひと申句に、玉川とつけ侍しハいかに。是ハ

俊成卿哥に、ときかへしゐての下おひゆきめぐりあふせうれし

き玉川の水、と侍にて、

契にむすふいてのしたおひ と申句に、

玉河の水のふかきをたのみにて と付し也。

(二二)いもりのしるしと申句に、ぬくゝつと侍しハいかに。是ハ、

奥義抄に、しるされて侍やらん、ぬくゝつのかさなる事のかさなる

ハいもりのしるしはあら』しな、と侍哥にて、

契をくいもりのしるしあたなれハ、と侍にて、

むなしきくつやかたみならまし、と付し也。

大方、本哥のよりあひにて、連哥とみせんかために、下の句を、み

なはしめにかきをきて侍れとも、下句にかやうの句いてきたる時

ハ、上句につけ、上句三是てい句いてきたる時は、下句をつけさせ

んかため也。抑いもりのしるしに、ぬくつつのよりあひ』(45ウ)を

付てのち、ぬくつとも、むなしきくつとも申事ハ、まれなる風情

にて侍に、いかう心へ侍へき。是ハ、連哥のよりあひに、尤心うへ

き大事也。むなしきくつやかたみならまし、と侍らハ、をのつから竹

のそのうに眺みえて、とこそ侍侍らん。是ハ、あまりにあさき事な

れとも、薩埵王子の心とやらん、人の申侍し也。

(三三)野中のし水と申句に、もとの心と付侍ハいかに。是ハ古

今三、いにしへの野中のし水ぬるけれともとの心を知人そくむ、

と侍にて、

野中の清水ふかくたのまむ、と申句に、

いまももとの心のかハらすは、と付し也。

(三三)野中のしの原と申句に、木からしをつけ侍はいかに。是ハ

新古今三、たかまとののちのしの原末さきそ、や木からしけふ吹

ぬ也、と侍哥にて、

夕はさむ支秋の木からしと申句に、』(46ウ)

露はちふのちのしの原分露て、と付し也。

(三三)野守のかみと申句に、はしたかと申侍しハいかに。是ハ

-15 80 35 485" data-label="Text">

万葉に、はしたかの野守のかみえてしかなおもひおもわずよそな

はしたかの恋に心はつくせとも、と付し也。

(三三)おやのいさめと申句に、うたゝねと侍ハいかに。たらちね

のをやのいさめしうたゝねハ物思ふ時』わさにそありける。

いさめしをやのおもかけをたつ、と申句に、

うたゝねのはかなき夢の手枕に、と付し也。

(三三)おなじかさしと申句に、吉野の山と付侍しハいかに。是ハ

古今に、わかやとゝたのむよしのに君すまハおなじかさしをさしこ

そはせめ、と侍にて、

花こそおなじかさし成けれ、と申句に、

ちることたのむよしの山桜、と付し也。又、』(47ウ)

おなじかさしの花の下ふし、と申句に、

さくらかりよしの山に日は暮て、と付し也。

(三三)おほろ月夜と申句に、しく物そなきとつけ侍しハいかに。

是ハ、てりもせずもりもはてぬ春のよの躰月よにしく物そなき、

とよみ侍哥にて、

むめのにほひにしく物そなき、と申句に、

花の色ハおほろ月夜にまかへとも、と付し也。』

(三七)尾花渡よると申句に、まのゝ入えをつけ侍ハいかに。是ハ

俊頼の哥に、うつらなくまのゝ入江のはま風に尾花なみよる秋の夕

くれ、と侍にて、

を花みたれて秋かせそふく、と申句に、

みつしほのまのゝ入江のはま風に、と付し也。

-15 535 55 945" data-label="Text">

(三三)草のいほりと申句に、涙なそへそと侍しハいかに。是ハ、

-35 535 -15 945" data-label="Text">

新古今三、俊成卿哥、むかし思ふ草のいほりのよるの雨に涙なそ、

-55 535 -35 715" data-label="Text">

そ山郭公と侍にて、』(48ウ)

涙そへたるそてのうへかなと申句に、

秋ふかき草のいほりハ露けきにと付し也。

(三九) 草の枕と申句に、たのめもをかぬと申侍しハいかに。是ハ伊勢物かたりに、枕とて草ひきむす事もあらし秋のよとたにたのまねなくに、と侍哥にて、

たのめもをかぬ人そ恋しきと申句に、

秋の草ひきむす枕してと侍し也。」

(三〇) くれは鳥と申句に、あやとつゝ侍ハいかに。是ハ後撰に、くれはとりあやに恋しくありしかは二むら山もこゑす成にき、と侍にて、

あやしく春のいつち行らん と申句に、

永きひも霞てつるに暮は鳥 又、

わかるゝ雲の二むらの山 と申句に、
秋の日の時雨くてくれはとり と付し也。

(三一) 草のふかきと申句に、まきもくの檜原と付て侍しハいかに。是ハ万葉に、まきもくのひはらもいまたくもらねはこ松かうへにあは雪そふる、と申こと葉のゑんにて、

霞にくもるはるはきにけり と申句に、

まきもくの檜原の木すゑ雪きえて と付し也。

(三二) 草のふかきと申句に、たまきはると付て侍しハいかに。是ハ万葉に、たまきはるうちのおは野にこまなへてあさふますらんそのくさふかに、と侍哥にて、たまきはるハ玉冠春とかけり。心はよき時の春也。くさふかきハ、草深也。

くさふかけれハみちもおほえず と申句に、
ふる雨の名残の春のたまきはると付し也。

(三三) 雲のはたてと申句に、あまつ空なるつつけ侍しハいかに。是ハ夕暮の雲のはたてに物そ思ふあまつ空なる人をこふとて、と侍哥にて、

雲のはたてやまたみたるらん と申句に、(50ウ)

風の音のあまつ空なる夕しけれ と付し也。

(三四) 水鶏のたゞくと申句に、うしまとをつつけ侍ハいかに。是ハ俊賴の、うしまとのたゞく水鶏の音す也波うちあけて誰かとふらん、と説にて、

たゞく水鶏の人はかるらん と申句に、

(付句欠)

(三五) 山のかすみと申句に、都のさかひと付て侍しハいかに。是ハ古今の哥に、山かくす春の霞そらめしきいづれみやこのさかひなるらん、と侍にて、

夕の霞山なへたてそ と申句に、

ちかくなる都のさかいとふハかり と付し也。

(三六) 柳のいと申句に、うちたれかみと侍しハいかに。是ハ古今に、さほひめのうちたれかみのたまやなきたゝ春風そけつるなりけり、と侍にて、

やなきのいとそ風にみたるゝ と申句に、

をとめ子かうちたれかみのすそみえて と付し也。

(三七) 柳かけと申句に、ならすこまかなと侍しハいかに。(51ウ) 是ハ、後拾遺に好忠か哥に、夏衣たつたかへらの柳かけすゝみにきつゝならすこまかな、と侍にて、

葉の落る柳の木すゑ風たかし と申葉句に、
しくれハ雲をならすころとて と付し也。

(二三〇) 山中と申句に、あけのそほ舟と侍しハ如何に。是ハ万葉に、旅にして物恋しきに山もとのあけのそほ舟おきにくみゆ、と侍本哥にて、新古今にも、春のよのあけのそほ舟ほのく」といく山もとを霞きぬらん、とよまれたるにて、
落る紅葉やあけのそほ舟と申句に、
あき紅葉やあけのそほ舟と申句に、
秋風のしりてくる山本に、と付し也。

(二三一) 山本と申句に、みなせ川をつけ侍はいかに。是も新古今に、みわたせハ山もとかすむみなせ川夕ハ秋となにおもひけむ、と侍にて、
山もと遠く秋風そふく、と申句に、
夕霧のうきてなかるゝみなせ川、と付し也。』(52ウ)

(二三〇) 山の井と申句に、有てわかるゝと付しはいかに。是ハ貫之か、むすふてのしづくににこる山の井のおかても人にわかぬるか、とよめるにて、
すゝしさあかぬ夏の木かくれ、と申句に、
むすへともあまりにあさき山の井に、と付し也。

(二二四) 山のふかきと申句に、鳥の音もきこえぬと付しはいかに。是ハ古今に、とふとりのこゑもきこえぬおく山のふかき心を入ハしらなん、と申にて、
鳥のねきかて明しのゝめ、と申句に、
おくふかき山ちの旅のひとりねに、と付し也。

(二二五) 山かハと申句に、国のみやこと付しはいかに。是は万葉に、いまつくるくにのみやこハ山かハのきよくみゆるハうへしらなるよし、と侍にて、

なかれをうくる山かハの水、と申句に、
いにしへの国のみやこのあとまでも、と付し也。
(二二五) 山ととりと申句に、かすみを付侍しはいかに。是ハ万葉に、山とりのほろのますをにかゝみかけかなふみこそなによそりけり、と侍哥にて、
かゝみのかげのなとくもるらむ、と申句に、
山とりの屋上の月のむら時雨、と付し也。

(二二四) やまふきと申句に、くちなしをつけ侍はいかに。是ハ、千載集に定経哥に、くちなしの色にそする山吹の花のもとゆく三井の河水、と侍哥にて、
おなしがさしの山ふきの花、と申句に、
くちなしの色奈る袖を返しても、と付し也。

(二二五) 山路と申句に、きくをつけ侍はいかに。これハこきんに、ぬれてほす山ちのきくの露のまにいつかちとせを我はへにけん、と侍にて、
袖にそかゝるきくのしら露、と申句に、
さかふへき秋の山ちを夕越て、と付し也。

(二二四) 山おろしと申句に、はけしかれと付侍しはいかに。』(54ウ) 是ハ俊頼卿の、うかりける人をはつせのやまおろしよはけしかれとハいのらぬものを、とよめるにて、
はけしく成ぬ秋のけしきハ、と申句に、
身のおもひきてもやいまは山風、と付し也。

(二二五) 山となてしこと申句に、ならの都と付て侍はいかに。是ハ万葉に、ひめもすに見れともあかすあをによしならのみやこの山となてし」と、と侍にて、

草にまじれる山となてして　と申句に、

古郷ふるさととならの都を住なして　と付し也。

(四〇) 山鳥からすと申句に、我かへる時と付て侍しハいかに。是ハまん燕の太子丹たいしたんか心を後拾遺ごしゆいに、山からすかしらもしろく成にけり我かへる

へき時ときやきぬらん、と侍にて、
わか帰かへへきみちもおほえず　と申句に、

山からすかしらもしろくふる雪ゆきに　と付し也。『(55ウ)』

(四一) 山ことしまと申句に、あかしのとまりと付て侍しハいかに。是ハ八まる丸まる哥かに、あまさかるひなのなかみちこきくれハあかしのとよ

り山ことしまみゆ、と侍にて、
あかしのとをくいづるふな人　と申句に、

帰かへみるかたハかすみて山としま　と付し也。

(四二) ま木のとと申句に、いさよひと付て侍しハいかに。是ハ古こ今こ君きみやこむ我われやゆかむのいさよいさよ「ま木の板戸いたともさすねにけ

り。
ま木の戸山との木からしの風　と申句に、

いてやらて時雨しきり、月のいさよいさよに　と付し也。

(四三) ますかみと申句に、人のたからと付侍しハいかに。後拾ごしゆ遺いに、ともすれハたまにくらへしますか、み人のたからとみるそか

なしき、と侍哥にて、
人のたからハよしやかそへし　と申句に、『(56ウ)』

身のほとをおもへハうきのますかみ　と付し也。

(四四) またも会あみむと申句に、二もの杉すぎと侍しハいかに。是ハ、
古こ今こせん頭かしら歌うた、はつせかハふるかは野のへに二もとあるすきとし

をへてまたもあひ見ん。と侍を本哥ほんにて、
またとあひみる中なと成ぬる　と申句に、

二ものすきにしかたハ夢ゆめかとよ　と申侍し也。

(四五) まか木と申句に、きりくすつけと付侍しハいかに。是ハ古こ今こに、秋あきはきぬいまやまか木のきりくすつけよなつけなつけかむ風のさむさ

に、と侍を、
秋あきのまかきそなをもさひしき　と申句に、

露つゆ霜しもにこそなきかれてきりくす　侍し也。

(四六) ましらなくと申句に、わひしらとつけ侍しハいかに。是ハ古こ今こに、わひしらにましらななきそあしひきの山やまのかひあるけふにや

ハあらぬ、と侍にて、『(57ウ)』
氣けにわひしらになかきよはかな　と申句に、

有明あきりの月にましらの聲こゑたてたてと付し也。

(四七) ま木はしらと申句に、とき半はんの杜ととつ希け侍しハ如何いかに。是

ハ、なをたのむ常とこハのもりのまきはしらわれなわすれそくちハしぬ

とも、と申哥にて、
とき半はんのもりハときはかきらし　と申句に、

殿との作つくりひさしくたてよまきハしら　と付し也。』

(四八) けしきと申句に、杜とを付侍しハいかに。是ハ、けしきのもり

とて、大隅おほしほに侍ま。そのよりあひひて、詞花ことばの哥うたに、秋あきちかきけしき

のもりになく蟬せみの涙なみだの露つゆや下葉したはをむらん、と侍にて、
老おいてしほるら杜とのした草くさ　と申句に、

秋あきはては人のけしきもかはる世よに　と付し也。

(四九) ふかきよと申句に、おほろけならぬとつけ侍しハいかに。是

ハ源氏げんじに、ふかきよのあハれを』(58ウ)しるも入月いづみづきのおほろけな

らぬ契ちぎりとそ思ふ、と侍哥にて、

おほろけならぬ花のにはひに 　と申句に、
かすむよそ哀あはれもふかき春の月 　と付し也。

(二五〇) ふち衣と申句に、いな葉の露とつけ侍はいかに。是ハ古今ニ、ほにもいてぬ山田をもるとふちころもいな葉の露にぬれぬ日はなし、と侍哥にて、

田つらのおしねもりあかしつゝ

露つゆなからかたしく袖そでやふち衣 　と付し也。

(二五〇) 舟ふねと申句に、かりかねをつけ侍はいかに。是ハ古今ニ、秋かせにこえをほにあけてくるふねハあまのとわたるかりにそありける、と侍にて、

遠とほさかり行波なみのうきふね 　と申句に、

秋あききりのたえまの空そらにかりなきて 　と付し也。

(二六一) ふたゝひあへると申句に、たけくまの松まつを』(59ウ)付侍つけはいかに。是ハ後撰に、うへしとき契ちぎをしけんたけくまの松まつをふたゝひあひみつるかな、とつけて侍にて、

ふたゝひとたにあへぬかなしきさ 　と申句に、

たけくまの松まつよむなしきいつはりに 　と付し也。

(二六二) ふかくさのと申句に、たけのは山やまとつけ侍はいかに。是ハ家隆たかの哥に、ふかくさや竹たけのは山の夕霧ゆきりに人こそ見えねうつらなく也、と侍にて、

あさをく露つゆやふかくさのさと 　と申句ニ、

くれ竹たけの梨山なしもくもるあさきりに 　と付し也。

(二六三) ふしのねと申句に、時ときしらぬと侍はいかに。是ハ伊勢物

かたりに、時ときしらぬ山やまハふしのねいつとてかかのこまたらに雪ゆきのふるらん、と侍はいを本哥ほんかにて、近比ちかひの哥うたにも、ふしのねハさきちる花はなのならいまでなをときしらぬ山やまさくらかな、と侍ハ、

なとときしらぬ我身わがみ成らん 　と申句に、』(60ウ)

ふしのねも冬ふゆこそ雪ゆきはつもりけれ 　と申侍し也。

(二六四) このした露つゆと申句に、宮木みやぎのを付侍つけかに。是ハ古今ニ、みさふらいみかさと申せみやきのゝ木きの下露したつゆは雨あめにまされり、と侍にて、

木きの下露したつゆは露つゆもかわかす 　と申句に、

朝あさきりのはれ行かたを宮木みやぎ野のに 　と付し也。

(二六五) こひのつもると申句に、みな川の川がはとつけ侍はい如何いかに。是ハ後撰ごせんに、つくはねの釜かまよりおつるみな川の川がは恋こひそつもりてふちと成ける、と侍にて、

あはぬ日ひかすそ恋こひにつもれる 　と申句に、

いたつらにおもひハふかきみな川の川がは 　と付し也。

(二六六) ころもの玉たまと申句に、すみえの松まつをつけ侍はいかに。是ハ後拾遺ごしゆいに、ときかけつ衣ころものたまはすみえの袖かみさひにける松の木まつすゑに、と侍哥にて、

衣ころものたまの色いろやみゆらん 　と申句に、』(61ウ)

住すまのえの松風まつかぜさえてふるあられ 　と付し也。

(二六七) 又また、ころものたまに、ゑいさめてなとつけ侍はいかに。是ハ後撰ごせんに、衣ころもなるたまもかけてしらすりきゑいさめてこそおもひあらずれ、と侍にて、

すゝめし三寸さんすんのゑいささめぬる 　と申句に、

しゐてなを衣ころものたまをたつぬれハ 　と付し也。

(一七七) ことのねと申句に、山下水したみづをつけ侍まじはいかに。是ハ、流水りゅうすいの心を後撰こうせんに、あしひきの山下水したみづハ「ゆきかよひ琴ことのねにさへなかるへら也、と侍哥まじにて、流ながてきたる山のした水みづと申句に、ことの音ねときけハ夕ゆふの松まつの風かぜと付つし也。

(一七八) ことの音ねに、松風まつかぜとつけ侍事まじはいかに。是ハ古今ここん、ことの音ねに峯ねの松風まつかぜ通かよらしいつれのをよりしらへ初はつけん、と侍哥まじにて、あるしハ誰たれの松風まつかぜそふくと申句に、』(62ウ)

(コノ後欠)